

# vol. 14 愛媛県立新居浜病院ニュース

発行元 愛媛県立新居浜病院 編集 地域医療連携室 〒792-0042 新居浜市本郷三丁目1番1号  
代表電話(0897)43-6161 FAX(0897)41-2900 <http://www.eph.pref.ehime.jp/epnh/>



糖尿病外来を始めました。(内科 南尚佳)

甲状腺の病気について(外科 明比俊)

県立新居浜病院産婦人科(村上隆浩)



## 糖尿病外来を始めました。南尚佳



内科(糖尿病)

医師 南尚佳  
(みなみ ひさか)

Q1 専門分野は？  
A1 糖尿病・内分泌・代謝

- Q2 医師になった理由は？  
A2 人と関わる職業を選択したため。
- Q3 趣味・特技は？  
A3 名画鑑賞、音楽鑑賞
- Q4 患者様に接する際、心がけていることは？  
A4 傾聴です。
- Q5 ひと言どうぞ。  
A5 1982年の夏、愛媛大学合唱団の合宿が別子中学校の体育館で行われ、みんなで銅山登山をしたことは懐かしい思い出です。これからよろしくお願いします。

本年7月から県立新居浜病院内科に赴任いたしました。1995年から10年間は、愛媛大学医学部附属病院において糖尿病・内分泌代謝疾患を中心に診療しました。1995年に愛媛チーム医療研修会が発足し、糖尿病のチーム医療が愛媛において発展の一途を辿った10年間でもありました。教育機関でもあり、研修会の企画や運営にも参加する機会に恵まれ、糖尿病診療に取り組みたいという**コメディカル\***とともに糖尿病療養指導について私自身も多くを学ばせて頂き感謝しています。

2005年から済生会西条病院に赴任し、大学病院での経験を生かし、新居浜・西条地区の基幹病院の糖尿病に関わる先生や糖尿病専門医の先生と各病院の熱心なコメディ

カルと共に、この5年間は東予地区における糖尿病チームスタッフの技能向上とチーム医療の発展に尽力してきました。糖尿病を専門とされていない開業医の先生方ともいい形での病院連携を進めてきました。引き続き発展させていきたいと考えています。

**糖尿病治療薬や医療技術の進歩により、血糖コントロールについてはかなり外来にて対応できるようになりました。**最近では理解力のある若い1型糖尿病患者さんの希望に沿って強化インスリン治療からインスリン持続皮下注入療法(GSII)へ切り替えも外来にて入院せずに行いました。40歳以上の3人に1人が糖尿病、またはその予備軍である可能性が指摘されています。コントロールが悪いのはわかっていますがなかなか入院する時間の無い人たちも多くいらっしゃいます。外来での支援システムを充実して、できるだけ外来で血糖コントロールをできるようにします。そうはいつでも高血糖状態、高齢者、感染症の合併、糖尿病性壊疽、血管合併症、



## 糖尿病スタッフ

前列左より 南先生 野中先生 芝田先生



手術前の血糖コントロールではどうしても入院が必要な場合が生じます。当院におきましても各コメディカルと共に、個々の病態において的確に対応し、迅速な問題解決をはかりたいと考えています。短期間の教育入院を希望される場合は1週間のプログラムで対応します。

看護部門がフットケアに積極的に取り組むようになり、コメディカルの糖尿病ケアへの役割、治療者としての重要度が増しています。コメディカルが生き生きと活躍できるように、チーム医療の充実を進めます。

日本において糖尿病患者は加速度的に増

加し、国としてもその対策が最重要課題になっています。**糖尿病の発症予防、早期発見、合併症の予防の促進が急がれています。**2005年に日本医師会、日本糖尿病学会、日本糖尿病協会が共同して糖尿病対策推進会議が設立されました。2007年に日本歯科医師会が加わり、愛媛においても愛媛県糖尿病対策推進会議が組織され、県レベルでの取り組みが協議されています。実践として重要なのは糖尿病対策を推進するための地域における病診連携の構築です。今後は地域に則した病診連携を他の推進会議の実行委員や地域の先生方と共に協力し進めていきたいと思っております。私も微力ながらできるだけのことをしたいと考えています。良いアイデアがありましたら御教示宜しくお願い致します。

**\*コメディカル**とは、医師・歯科医師以外の看護師を含む医療従事者の総称として用いられる。医療の高度化・複雑化に伴い、医療業務の細分化・分業化が進み、コメディカルは日々の自己研鑽を重ね、高度な専門性を生かし、業務に携わることが求められている。そして、各部門が有機的に連携し、チーム医療を実現することが医療の質の向上に直結している。



8月5日に院内感染管理チームが『標準予防策・感染経路別予防策』の研修会を行いました。



近隣の病院関係者、在宅介護に関わる方々をお招きして研修を行いました。当日は院外より約60名の方にご参加いただき、実践を交えた防護用具着脱をはじめ、手指衛生など感染予防策の勉強を行いました。今後も地域連携の一環として研修会を行って参りたいと思っております。

# 甲状腺の病気について 明比 俊



フレデリック・カールトン・ルイス（カール・ルイス）は1961年生まれのアメリカ人で、有名な元陸上競技選手です。1984年ロサンゼルスオリンピックで100m、200m、走り幅跳び、4×100mリレーの4種目で金メダルを獲得し、その後、1988年ソウルで2個、1992年バルセロナでも2個の金メダルを獲得しました。

最後のオリンピックに出場する5ヶ月前、34歳のルイスは、いつもどおりにうけた健康診断の血液検査の結果、内分泌専門医より“**甲状腺機能低下症**”を指摘されました。彼は、症状や徴候には、まったく気がついていませんでした。更に精密検査を受けた結果、**慢性甲状腺炎（橋本病）**と診断されました。すなわち、甲状腺の慢性炎症が彼の甲状腺機能低下症を起こしていることがはっきりしました。

慢性甲状腺炎は自己免疫疾患で、アメリカでは成人の5%（日本では成人女性の約4%）が罹患しており、甲状腺機能低下症の原因としていちばん多いものです。甲状腺機能低下症の治療は簡単で、安全かつ非常に効果的な甲状腺ホルモン補充療法です。彼は、甲状腺ホルモン剤を1日1回、毎日空腹時に飲み始めました。内服治療を始めて4週間経たないうちに、気分が良くなり始め、6週間飲んだ後、いつになく気分が良いのに気づきました。

ルイスは、アトランタオリンピックが終わるまで、自分の甲状腺の病気のことを公表しませんでした。そして、甲状腺機能低下症の診断を受けてから5ヶ月经った1996年夏、彼は夢をかなえました。走り幅跳びで鮮やかに空を切り、さらにもう1つ金メダルを獲得したことで、近代オリンピック史上4人目となる個人9個の金メダルの獲得者となりました（その後、マイケル・フェルプスは個人14個の金メダルを獲得しています）。「甲状腺に病気のあるほとんどの人がそうであるように、私にもその病気があるなんてちっともわからなかったのです。調べてもらったことはまったくの偶然で、幸運としか言いようがありません。医師に甲状腺の病気を調べてもらうことの大切さはどれほど強調しても足りないくらいです。」と、ルイスは著書の中に書いてあります。

甲状腺は、**甲状軟骨（のどぼとけ）**のやや下で気管を前から包み込むようにある蝶々のような形をした臓器で、**甲状腺ホルモン**を産生する**内分泌臓器**です。甲状腺ホルモンは、**発育や成長に欠かすことができません**、**全身の組織、細胞の新陳代謝を活発にする働きがあり、精神神経や身体活動の調整にも働きます**。

甲状腺ホルモンが少なくなると、むくんで体重が増えたり、脈はゆっくりになり、いつもボーッとして眠たがりになったり、寒がり、髪が抜けやすく、便秘になります。これが**甲状腺機能低下症**です。甲状腺ホルモン剤の内服による治療で、これらの症状が劇的によくなる可能性があります。

反対に、甲状腺ホルモンが多すぎると、体重が減ったり、手がふるえたり、脈が速くなって動悸を感じたり、暑がりになり汗をかきやすくなり、イライラしたり、下痢になります（**甲状腺機能亢進症**）。この状態の代表的なものが**バセドウ病**です。治療しないで病気が進むと、心房細動という不整脈になり、心不全になったり、さらに心房内血栓ができ、これが脳に流れていって脳梗塞を引き起こし、重篤な病態になる可能性もあります。

バセドウ病を持つ有名人は、**ジョージ・ブッシュ**（第41代アメリカ合衆国大統領）、**田中角栄**（元



内閣総理大臣)、増田恵子（ピンクレディーの Kei）や夏目雅子（俳優）などたくさんいます。クレオパトラもその肖像や性格からバセドウ病であった可能性が推測されています。最近では絢香（シンガー・ソングライター）がこの病気になったことを公表したのが記憶に新しいところです。

バセドウ病の治療は、日本では内服薬による治療が一般的です。副作用などで内服治療ができない場合などは、放射性ヨードによる治療、手術などが選択される場合もあります。

甲状腺機能に異常がある場合は、甲状腺が全体に腫れることが多いのですが、甲状腺の病気としては、甲状腺内に腫瘍（シコリ）ができる場合もあります（結節性甲状腺腫）。良性の腺腫や甲状腺癌などです。基本的に、良性の腫瘍の場合には手術の必要はありませんが、癌の可能性が強く疑われる場合や甲状腺癌と診断がついた場合には手術が必要になります。

当院では、**平成 22 年 4 月から、火曜日の午後に甲状腺専門外来を新設しました。**甲状腺疾患の診断から治療（手術の場合には約 7 日間の入院が必要です）まで診療していますので、甲状腺の病気が気になる方は、是非、受診してください。



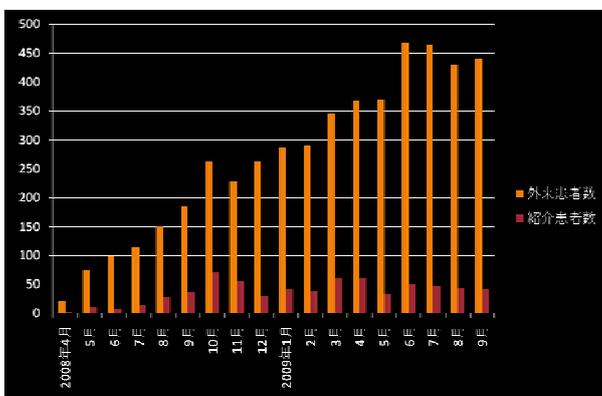
## 県立新居浜病院産婦人科 村上 隆浩



手前左から  
矢野医師、村上医師、上野医師と外来スタッフ

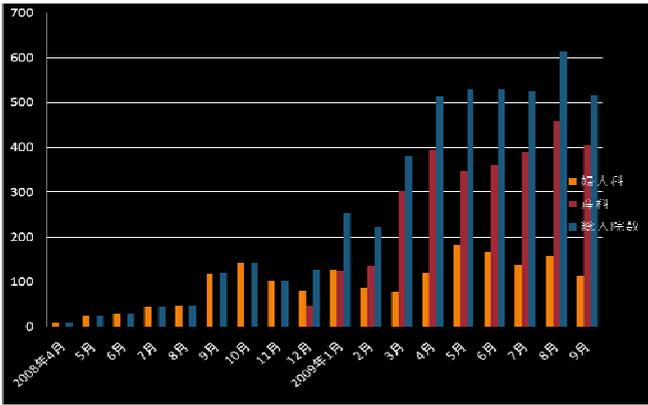
現在、県立新居浜病院産婦人科は、医師 3 名（村上隆浩、矢野直樹、上野 繁）、病棟看護師 17 名（内助産師 10 名）、外来看護師 2 名、看護助手 1 名で産婦人科を運営しています。平成 20 年 4 月に旧小児科外来を改修し産婦人科外来を開設しましたが、他に何も設備が整っていない状態でのスタートでした。病院スタッフも産婦人科診療との関係が無かったため、産婦人科が新設されることにとまどいはあったようでしたが、県立新居浜病院の診療マニュアルに従い産婦人科の診療体制を整え、婦人科疾患を中心に外科病棟、HCU を借りて手術、化学療法などの治療を開始しました。

「県立病院の産婦人科は何かできるの」と聞かれながら、治療させて頂いた患者さんから「ここで治療を受けることができよかった」と言われることが嬉しく、スタッフ一同、前向きに産婦人科の準備をすることができました。同年 12 月 5 日に産婦人科病棟始動と同時に産婦人科救急に対応し周産期センターになるための基盤を作るため、当院の一次当直、センター当直から離れ、**産婦人科の 24 時間当直体制を開始**しました。緊急性が高い産科診療を開始することは、病院スタッフには大変なストレスになったと思います。産科診療を開始して 1 年 9 ヶ月

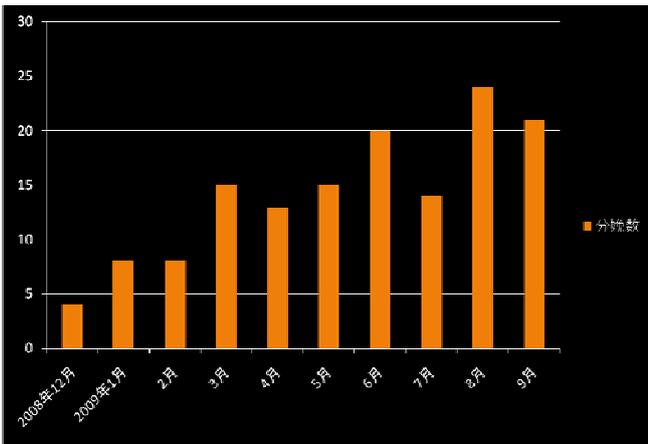


グラフ 1 外来患者数の推移（紹介患者）

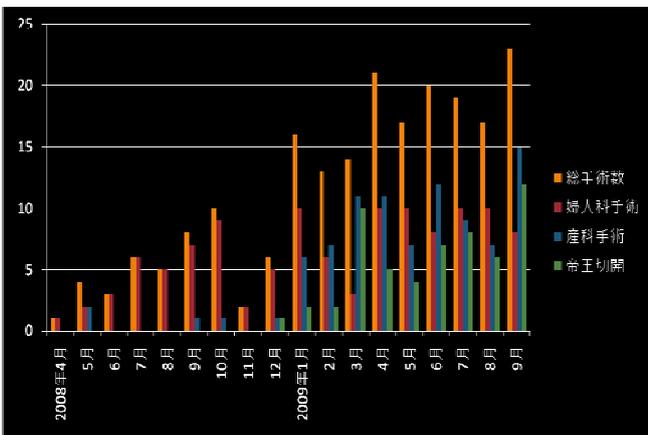
グラフ2 外来患者数の推移(紹介患者)



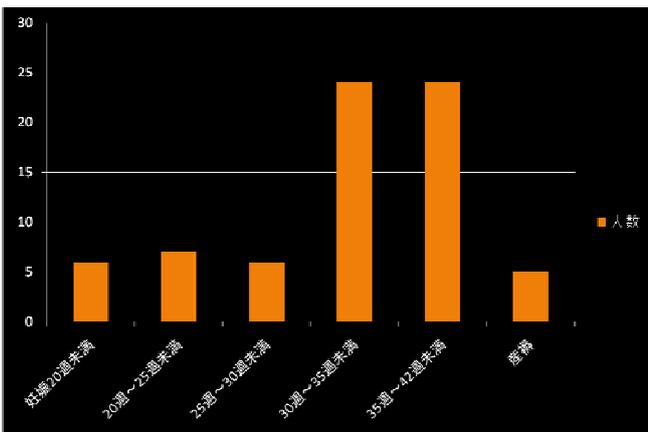
グラフ3 分娩の推移



グラフ4 手術症例数の推移



グラフ5 時間外緊急母胎搬送患者の妊娠週数 (2009年1月~9月)

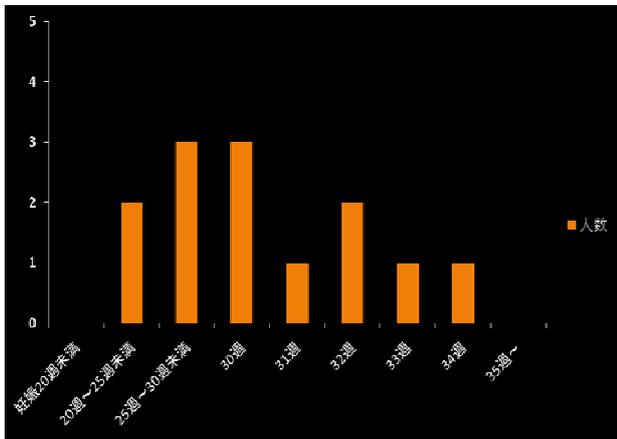


近くになりますが、以前県立新居浜病院ニュースに書いた小児科との決め事、緊急連絡網などは変わっていませんが、病院のマンパワー（特に小児科、麻酔科の先生、手術室、検査部のスタッフなど）が増加して周産期センターになることを願っています。

診療面では、平成20年9月末で住友病院産婦人科が閉鎖となり、婦人科患者は増加し続けていますが、産科は紹介患者、緊急母体搬送が主体です。**産科的には、母児同床で助産師による母乳育児の推進、支援に力を入れています。**統計的に平成21年4月以降は、**月平均で約50人の新規外来患者**を紹介して頂いており、**約10人の時間外母体搬送入院**があり、**分娩数は約20例、手術件数も20~30例**になっております。産科手術では**緊急帝王切開、頸管縫縮術**が多く、**妊娠高血圧症、胎盤早期剥離、前置胎盤**など母体の生命に関わる疾患も妊娠35週0日以降であれば当科での出産も可能となり、県立中央病院に母体搬送することなく管理しています。婦人科的には**子宮筋腫、卵巣嚢腫、子宮内膜症、子宮脱・膀胱脱**など良性疾患の患者さんが多いのですが、手術は、患者の負担が少ないように**開腹手術、経膈手術、腹腔鏡下手術、TCR**など**子宮鏡下手術、レーザー手術**など幅広く行っています。また真皮縫合などを手術創部ができるだけ綺麗になるように心がけています。**子宮頸癌、子宮体癌、卵巣癌**など悪性腫瘍の患者も当院での治療を希望されれば手術、**化学療法、緩和ケア**も安全に行っています。外来診療では、平成21年7月より**毎週火曜日午前**は**愛媛大学産婦人科教室**より**応援**を頂いています。現在、森先生、高木先生に来て頂いており、**女性の産婦人科医に診察してほしい患者の**

ニーズに応えることができます。

グラフ 6 時間外緊急母胎搬送患者の妊娠週数  
(2009年1月～9月)



最後に当科は、24時間当直体制をとっており、時間外の診察依頼、母体搬送依頼は原則断らないように3人とも頑張っています。現在はまだ当院小児科での新生児管理は妊娠35週以降なので、月平均1例の県立中央病院へ母体搬送を依頼しています。母体搬送で医師がついて行くこともあり、患者の診察、搬送依頼が重なったり、手術中であると医師3人では依頼を受けることができなくなります。また一番大きな問題点として病院機能の問題で他科が手術中は緊急手術が必要となる母体搬送をうけることができないこととなります。(心臓血管外科、脳外科、外科の定期・緊急手術も増加しています。)私た

ち自身も県立中央病院から当直応援をしてもらいながら24時間当直を継続していますが、不測の事態のことも考えておかなければなりません。場合により直接県立中央病院への搬送をお願いする場面があることをご容赦お願いします。当院産婦人科は、東予地方の産婦人科の救急を担っていくことが当科の使命だと頑張っています。改善したい課題は沢山ありますが、良質な医療を患者の皆様提供できるように医師、看護師、スタッフが協力・努力し、地域の先生方、患者の皆様の声聞きながら信頼される産婦人科にしていきたいと思ひます。

これからも関係各位のご指導ご鞭撻をお願いします。

### 病棟スタッフ



### 7月にDrヘリが出動しました！！

当院ヘリポートより重篤な患者さんを遠隔地の病院に緊急搬送しました。

